

FD 通信 No. 2

飯田女子短期大学 FD 委員会

<http://www.iidawjc.ac.jp>

「組織的 FD の充実に向けて」

FD 委員長 松崎行代

FD 元年といわれる平成 10 年大学審議会の FD の定義は、「個々の教員の教育内容・授業方法の不断の改善」が強調されたものでした。その後、FD 義務化が開始された平成 20 年、中央教育審議会の学士課程答申では、「FD の定義・内容は論者によって様々であり、それは単に授業内容・方法の改善のための研究に限らず、広く教育の改善、さらには研究活動、社会貢献、管理運営にかかわる教員団の職能開発全般を指すもの」とされ、それまでの授業改善に特化した FD に対し国レベルの新しい解釈が示されました。これ以降各大学は、学修主体者である学生の学習効果を高めるために、何を目指し、どこに重点を置いた FD をやっていたりしようとするか、各大学が FD の定義を明示し取り組むようになっていきました。

本学 FD の 5 年の歩みを含めて、この 1 年を振り返ると、本学の FD の定義がないことへの問題を強く感じています。FD の定義が明確であれば、FD の手法である授業改善アンケートや講演会・ミーティング、それ自体が目的化するといった形骸化もなくなるでしょう。また、「シラバス見直しによる FD」への提案についても、どこの部署がどういった目的で遂行するかが明確となり、スムーズな取り組みが可能だったと思われます。来年度、まずは、この FD の定義を定めることに着手することが必要だと考えます。その際、私見ではありますが、授業改善アンケート・講演会・ミーティングを中心とした授業改善へ特化した現在の本学 FD の限界を感じます。個々の教員の授業が良いものになることも大事ですが、学生の短大での学び全体を捉え、大学教育全体を改善していくことを考えた FD がなくては、改善された個々の教員の教育力が十二分に活かされない、ひいては、学生の学習効果を高めることも十分に為し得ないことになると思います。

ある大学では、「カリキュラムや個々の授業についての配置・内容・方法・教材・評価等の適切性に関して、教員が職員と共同し、学生の参画を得て」すすめ、「それらの取り組みの妥当性、有効性について継続的に検証を行う」と、いわゆる PDCA サイクルも合わせたものを、大学で取り組む教職員の組織的な授業・教育改善＝FD として定義しています。規模や学内組織、FD の成熟度の違いはありますが、本学の FD の定義を考える際には、大学教育全体を視野に入れた検討が必要だと思います。それが、組織的な FD の充実になるのではないのでしょうか。

目次

「組織的 FD の充実に向けて」

FD 委員長 松崎行代

「組織的な FD の取り組み」

教務委員長 黒岩長造

「SD を通して見たこれからの短期大学」

SD 委員長 矢澤庸徳

<報告 1> FD 講演会

仁愛女子短期大学の FD 活動からの学び

家政学科 食物栄養専攻 千 裕美

〃

看護学科 脇坂幸子

<報告 2> FD ミーティング

FD 委員 1 年間の活動より 「FD 委員をつとめて」看護学科 中山美香



「組織的なFDの取り組み」

教務委員長 黒岩長造

FDは個人の努力で遂行するものではなく、組織で行っていくものと理解しているので、標題自体、意味が二重になってしまっているのではないかと、いうことを先ず指摘しておきたい。自分もFD委員でありながら、標題を指摘することに矛盾を感じるが、この指摘自体もFDに通ずると思う。先日の、学内集談会で、発表があった、クリティカルシンキングについて、この方略を持って、指摘することになると思うが、FDに対してのクリティカルシンキングは、前述の個人ではなくて、組織に向けられるものだろうと思う。教務委員長として、FDを考えたときに、教務委員会として話題にすべきこと、シラバスの検証や授業観察、研究授業等の課題が挙げられるが、その前提として委員会同士の結びつきが重要と考える。または、委員会と他部局との結びつきも考慮する必要がある。

FDの究極の目標を、大学全体の教育力の向上、としたときにその中心は、学習者(学生)となる。学習者中心アプローチを、全員による教育改革活動によって行う。その全員は、学習者であり、教員であり、事務職員であり、寮職員であり、全員が関与する物的環境である。個人の努力も必要であるが、それ以上に組織の結びつきが大切と考える。更に組織を越えた結びつきが可能となれば、FDは飛躍的に向上する。

学生は、家にいるときと大学にいるときと同じ顔をしている。これはおかしい。大学にいるときは、学習者の顔をしてほしい。そのためには、門の整備が必要であり、教室の空調の管理が必要であり、教員のシラバスや教科書が必要であり、パソコンが必要である。教務委員会と学生委員会と担当事務部門の連携、ディスカッションが必要になる。合同委員会を開催できればいいが、人数調整、日程調整が大変なので、小回りのきく各部門の垣根を越えた少人数のグループのディスカッションと実行が理想的である。大業なFD委員会ではなく、小規模の第一FD委員会、第二FD委員会でもなく、部門の異なるメンバーの小コミュニティである。そのためには、日常の他部門メンバーとのディスカッションが必要となり、その小コミュニティの結びつきが組織的な大学全体のFDの向上と考え、その提案をする部署が教務委員会(FD含む)と心得る。

「SDを通して見たこれからの短期大学」

SD委員長 矢澤庸徳

大学淘汰の時代、2010年には14短大・1大学、2011年には7短大・1大学が、2012年には6短大(予定)が募集停止をしています。FD・SDは改革の重要なポイントであり、[短大基準協会評価基準](#)にも規定されています。しかし[日短協の調査\(2011\)](#)によると、FD実施(授業評価)が97.3%である一方、SDは73.8%と割合はまだ高くない。本学のSDも、まだ、研修会、個人目標、学生アンケート、服装、対応の改善等にとどまっています。[岩崎保道氏\(同志社大学大学院\)](#)は経営困難に陥る短大の事例研究で「FD・SDの未取り組みが、教育機能や教育サービスを減減させ、学園経営に悪影響をもたらした。(一部省略)」と指摘し、FD・SDの重要性を指摘しています。

佐々木一也教授による立教大学の例では、かつての組織主義と熱意ある職人的な職員が教員を支える形が、学部の増加等による多忙化から“燃え尽き症候群”退職が増加し、業務がシステム化していった。しかし学生の多様化による種々の問題に対応ができなくなり、成果主義の導入をきっかけに士気が下がり、組織の機能不全が発生。そのため、現在は、組織を有機的で柔軟な形にし、全学で目標と課題を共有し、各人が誇りと自信を持てるよう改革に臨んでいる。それを「教職協働」から「大学人同士の協働」と表現していました。

大学のやり方が短大に当てはまるとは思えませんが、[中教審の学士課程答申\(2008\)](#)にあるように、大学は学習成果重視へと変化しています。我々も用意した組織・役割で何ができるかという発想ではなく、まず学生を主体と考え、そのためにはどのような目標が必要で、だから何をしなければいけないか。その中ですべき事は何か、という発想の転換をはかるべきではないでしょうか。

厳しい時代にありながら、近畿・中国地方では地域に密着した小規模校に、学生が比較的集まっているそうです。本学もFD・SDを通して全教職員共通の目標をかかげ、地域から必要とされ、無くてはならない学校であり続けたいと願ってやみません。

※アンダーラインのある部分はインターネットへのリンクが入っています。ツール 環境設定 トラストマネージャーをOFFにしてください。

<報告 1>

FD講演会

「仁愛女子短期大学のFD活動」

講師 仁愛女子短期大学 FD 委員長 内藤徹氏

平成 24 年 3 月 5 日（月）10 時～ 於：視聴覚室



3 月 5 日、仁愛女子短期大学 FD 委員長内藤徹先生を講師に招いて、短大教育等の改革、改善、質的向上に資するための授業改善などについての講演会を開催しました。

内藤徹先生は、仁愛女子短期大学の授業改善に取り組み、『授業の向上を目指して』を取りまとめられた先生で、本講演では、「FD 委員会・年史記録」「FD 研修」「フレックス FD チームとその取り組み」「学生への授業アンケートと分析」「教員への授業アンケートと結果」「学内研修（シンポジウム、公開授業）」などについて報告されました。授業評価の活用法や学生にとって良い授業のあり方では、具体的な実践例を基に、魅力ある授業づくりの取り組みについて紹介されました。

1. 「学生への授業アンケートと分析」「教員への授業アンケートと結果」の実施

授業評価は、中間評価と学期末に原則として、全ての授業科目において共通設問と個別設問で実施し、授業評価の結果は、今後の授業改善のための資料としている。授業評価の集計結果は公表し、学生、教員向けには、数値だけではなく、学生から寄せられた自由記述のまとめと授業評価に対する教員からのコメントも公開している。

2. 公開授業

公開授業は、授業担当者が授業を公開することで自分の授業の課題を明確にし、抱えている問題や悩みに関するアドバイスを得る場として位置づけて実施している。授業担当者は、見られる側に立つことによってアドバイスを得ることができ、授業参観者も公開された授業から自己の授業での改善点を見つけることができる。その際、授業担当教員からの申し出により、担当する授業についてビデオ撮影を行い、個々の先生における授業改善に役立てるような支援も行っている。

講演会には教職員の 7 割が出席し、講演者の熱意ある興味深い話に熱心に耳を傾けた。本短期大学の FD 事業、授業評価活動にも新たな活路が見いだされるものと期待できる。
(文責:伊藤洋子)

～仁愛女子短期大学のFD活動からの学び～

家政学科 食物栄養専攻 千 裕美

「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組み」(FD) について、文科省は 1999 年に短大の設置基準を改正し努力義務とした後、2008 年に義務化した。研究中心であった大学のあり方は、経済界からの要請もあり学生の教育にも力点を置くこととなった。このような背景において FD が進められているが、この度先駆的なお話を伺う機会に恵まれた。その中で印象に残った点がある。それは、「情報を可視化すること」と「連携を図ること」、そして実際に「できることを行うこと」の 3 点である。まず情報を収集して可視化し、連携をとってコミュニケーションを図り、実際にできるところから一歩ずつ進めることが重要であると学んだ。この学びを生かし、今後本学の FD をさらに充実させるために、一教員として真摯に努力したいと思う。

看護学科 脇坂幸子

福井県内の高等教育機関が連携するフレックスとしての活動の影響は大きく、各大学の FD を推進させているのではないかと感じた。また、FD 委員会に予算があり 1 年間の活動を冊子としてまとめ、広報することで各教員の FD 意識を向上させていると思う。常勤非常勤を問わず全科目への授業アンケートや教員への授業アンケートなどは、本学においても実施に向けて検討されると良いと思う。公開するアンケートの結果報告が個人別でないことも、教員の協力を得やすいと考える。仁愛女子短期大学の公開授業はコンセプトが明確であり、教員の意識も高い。本学でも FD 委員会が発足した時点から提案されている公開授業を推進していく必要性を感じた。

<報告 2>

FDミーティング

「学生に求める主体性とその指導」 ～KJ法によるグループワーク～

3月5日の午後、FDミーティングが開かれました。

FD委員会としては、今年度のFDミーティングのテーマ設定にあたり様々な議論を行って参りました。教員の教育能力向上のためにFD委員会がどのような貢献ができるのか。また、FDミーティングの時間が先生方にとって、少しでも有益だった、何か良かったと感じていただくためにはどのような仕掛けができるのか、などなど。

このような議論のなかで、FD委員会としてこれまで、先生方が教育能力向上のためにどのようなことを学びたいと感じておられるのか、また授業計画の立案について、また学生の指導にあたってどのようなことに困っておられるのかについての現状把握を行ってなかったということに気づきました。

そこで、FD委員会では11月に全教員を対象に自由記述によるアンケート調査を実施いたしました。このアンケートを通して、先生方の様々なご意見を頂戴しました。結果をまとめるなかで、先生方が「学生の主体性の欠如」を感じておられること。また主体性の欠如による授業展開の難しさや、具体的な対応や指導方法を学びたいと思われていることが分かりました。

しかし、簡単な自由記述でしたので、「主体性」といったときに具体的な学生の姿までは浮かび上がってはおりませんでした。委員自身も、「主体性といっても、曖昧なままで使っている」との気づきにもつながりました。

このような気づきや、普段意識していないことを共有したり、教育に対する姿勢を改めて整理することが、それぞれの教員にとっての「教育能力向上」の基盤になっていけるのではないかと、このねらいが今回のテーマ設定であり、グループワークという方法の選択になりました。

グループワークとして得られた各専攻・コース毎の結果やご感想については、以下にお示ししてあります。FD委員会としては、今回のFDミーティングの体験が先生方にとって単に「現状認識」にとどまらず、今後の教育実践にあたって、何らかの励みになって頂けたらと願っています。

(文責:坂上ちおり)



基礎教養

主体性とは何か？それは自分の行動に責任をもつこと、失敗しても人のせいにしない、次への意欲をもつことなどが考えられる。自発性をもたせるために、必要性、自尊心をくすぐる、帰属意識をもたせる、リーダーとしての経験などが必要である。そして教員の評価・視点として、役割遂行に対する評価をする、利害計算をさせない、多くの評価軸をもつことが求められる。また偶然から教養が広がる可能性もあるので、ランダムに1科目を選択するような試みがあってもおもしろい。初めて学ぶものは、まっさらで開放した心で学んでほしい。

生活造形コース

主体性といった時、まず「興味」⇔「考える」というやりとりが大事である。それが動機づけとなり「意欲」につながり、具体的な行動を伴う「経験」を通して実感される。指導法としては、アクティブラーニング、グループワークを取り入れ、卒業研究やボランティア活動に取り組ませるのも良いかもしれない。相手を認め、自分の考えを持つというコミュニケーションの力と、自分に対し自信をもつことが主体性につながると考える。

保健養護コース

「学ぶ楽しさを学ばせる」ための授業の組み立てを考えるワークとなった。疑問を主体的に解決するような仕掛けであったり、知識を定着させるための小テストや、学生同士が学び合う授業展開が大切であろう。これらの学びを支える根っこは、「豊かな人間性」であり「美しく生きる」ことである。中心には、学生の将来として「結実するリンゴの実」を描いた。

生活福祉専攻

もともと学生は「主体性を持っているはず」との人間観のもとワークが進められた。「夢＝将来像」を中心に描き、夢に向かって頑張っている学生像と、同じ学生が時に「私分かりません」「先生やって」と立ち止まってしまう現状が整理された。これらの学生の主体性を育てるために教員は「学生を知る」ことが大切である。そのために、問いかけをしたり、学び合ったり、ほめたりという関わりをしていきたい。というまとめであった。

食物栄養専攻

主体性がないと、ボーッとしたり、やる気が出ない。このような学生が主体性をもてるようになるために、教員は、達成感のある授業や興味をひくために楽しい授業をすること、学生の考えを導くような指導をするべきである。それにより考える力や行動に移す力がつく。最終的に主体的な行動を起こすことによって学生も教員も笑顔になる。しかし、指導法を誤ると、主体性のない姿に戻ってしまい、教員の指導と学生の主体性には関連性がある。

幼児教育学科

学生の主体性が感じられない姿は様々あげられたが、それらは、成功経験の少なさ等に原因の一端が考えられる。反面、主体性のある姿または学生に求める主体性として、意欲、思考力、行動力、探究心、集中力、表現力、自由に対する責任の7つをあげた。学生は、決して主体性がないわけではなく、有能観を感じられるようなものに対しては主体性を発揮できる。よって教員には、学生が理解しやすい授業の展開、自己有能観を高められる指導、教員の指導力を高めることが求められる。

看護学科

学生の主体性として判断力や責任感、考える力、続ける力、自律などが挙げられた。合わせて、これらの主体性の中身は、学生個人の資質によるものと環境の要因によるものがあるということも整理された。学生の主体性を育む教員の役割として、関わりのポイントが3つある。行動の意味を伝えること、授業の組み立てを工夫すること、そして教員がファシリテーターとして共に考え行動することである。



(感想)

改めて学生とどう関わるかについて考えることができました。主体性を求めるあまりに、学生に求めることが多くなっていた自分にも気がつきました。主体性を引き出すように教員が創意工夫をしていかなければならないという原点に戻って、専攻の教員が思いをひとつにしていくことを確認できて良かったです。今日の思いを忘れない為に、模造紙を貼っておくことにしました。(K.O)

学生の主体性を育む指導にかかわって、他の先生方の考えを学ぶことができて大変有意義な会でした。私自身は「学生一人ひとりを理解することの大切さ」「その学生の良さを伸ばす指導の重要性」を再認識することができました。(M.K)

FDミーティングを通して学科内の先生方の考えられていることを知る機会となり、先生方に対する理解促進につながった。また、今回得られた結果を教育活動にどうつなげていくかが重要な課題であるため、担当授業を振り返り、少しでも改善したいと考えている。(K.H)

毎日顔を合わせる仲間ですが、“教育”についてゆっくりと話し合う時間をもったことがなく、貴重な時間でした。教員自身に余裕(ゆとり)がないと、満足に学生と向かい合うことができないなと思っています。このような話し合い(何か結論が出なくても)が時々持てると元気がでます。学生に求める主体性の概念は、学科やコースによって大差ないと感じられましたが、主体性を育む具体的な方法、教員の意識には違いがみられ参考になりました。(M.I)

「主体性を持って行動してください」と学生に話しているが、その主体性とは何かを改めてじっくり考えることができて良かった。クラスミーティングなどでまた学生と一緒に考えていきたい。(R.Y)

「FD委員をつとめて」

看護学科 中山美香

今年度初めてFD委員として活動することになりました。活動内容は各先生方にFDアンケートを取ってもらえるよう声をかけ集計を行い冊子にまとめるまた、講演会やミーティングの設定が活動内容かと私は漠然と思っていました。実際にはFDアンケートに関することは行っていましたが、ただ集計するのではなく授業の質を上げるために、集計方法や学生からの意見をどのように活用するのか検討していました。またアンケートとは関係ありませんが、実験実習費の効果的な運用方法についても検討しました。さらに、教員の教育力向上のために研修会や講演会の設定、シラバスの検討、教員自身が主体的に取り組める環境づくりについて取り組みました。委員会で検討するに当たり、他大学の実状を調べたり、他の教員がどのように行っているのか知ることができました。このことは、FDに対する知識が浅かった私にとっては良い情報交換の場、勉強の場になりました。委員の一人としてお役に立てたかわかりませんが「学ぶ学生のために」と考えることができ、得るものが多かったように思います。そんな教員の姿を学生に見せていくことが、学生の学ぶ姿勢に変化をもたらすのではと感じています。1年間大変お世話になりました。

編集後記

本年度は、仁愛女子短期大学との相互評価の実施、そして、平成25年度に予定されている認証評価を視野に入れた学内各機関の活発な動きにより、全学が“改善”を強く意識し、“動き”が生じた1年だったように思います。キャリア教育も今年度検討を重ね、24年度から開始されます。全入時代の教育の課題はこれまでも話題に上がっていましたが、これにあわせ、専門職養成に直接結びつく専門的知識・技術の修得をねらった教育と、人間性や生きる力の育成といった人間教育、この両面からの教育の充実が望まれていることをあらためて実感しています。FD講演会の内藤先生のお話しに出てきた「授業・教育は、人間と出会うのであって、教材と出会うのではない」という言葉が胸に残ります。学生の丸ごとの育ちを考えたより良い教育を実現するために、今後も教職員一丸となってFDに取り組んでいきたいと思っています。(FD委員長：松崎行代)

飯田女子短期大学FD通信 No. 2 (発行日 2012年3月20日) 編集担当 FD委員会

委員長 松崎行代

委員 伊藤洋子 岩月すみ江 川俣幸一 木下雅子 黒岩長造 坂上ちおり 友竹浩之 中山美香 長谷川孝子

※FD通信へのご意見ご感想をお待ちしております。 fd@iidawjc.ac.jp